

小説国際プラント・ビジネス戦争（七）

郊外の研究室

杉田望

小川明夫は八王子駅で降り、タクシーを拾った。小川が訪ねようとしている日本エンジニアリングの技術研究所は車で五日市方向に二十分ほど走った、わりあい静かな多摩丘陵地帯にある。

この技術研究所が建設された二十年ほど前は東京近郊とはいえ、緑の多いちよつとした田舎の風情が残されていたものだった。が、さすがにこのあたりも都市化の波に吞まれて、田園風景は完全に失われていた。都市に勤めるサラリーマンたちの一戸建て住宅がびっしりと肩を寄せるように立ち並び、わずかに残されている森や畑は痛いたしく侵食されていた。

土地の人びとはこの研究所のことを「ニックビル」と呼んでいる。ニックビルは十八階建の高層ビルで、奥多摩の山やまを背にしてそびえ立つその姿は、周りに異様な威圧感を与えている。それでも初夏のまぶしい陽に照らされている様はそれなりに美しい。

小川に乗せた煉瓦色のタクシーはニックビルの正面玄関に横づけされた。車を降りた小川は、小走りで受付に向かった。ニックビルは一切の装飾的なものを排して、もっぱら機能のみを追求したつくり方で、天井を広く採った正面玄関の右奥に螺旋状の重厚なつくりの階段がある。

すでに連絡がついているとみえて、受付嬢は「承^{うけたまわ}っています」といって二階の応接室に案内した。企業機密の漏洩を防ぐという意味もあって、ここを訪ねる客が案内されるのは二階の応接室までだった。

まもなくして応接室に姿をみせたのは、やや小柄の五十年配の男だった。男は和村洋三^{わむらふようすけ}と名乗った。差し出された名刺には研究統括役員、取締役専務とあった。



和村の目は銀縁の眼鏡の奥で、鋭く探るように激しく動いていた。それは相手を値踏みするような目つきでもある。二人は挨拶を交わし、部厚い革張りのソファに腰を降ろした。和村は差し出された名刺を何度も覗き込んでいた。最初に切り出したのは小川の方だった。

「今日、お伺いしたのは、天然ガスを利用したメタノール事業化計画に関しまして、フィジビリティスタディをニック社にお願いできないか、そういうわけです。参

った次第です」

「話は私どもの並木副社長からだいたいのは伺っています。それではさっそくですが、フィジビリティスタディに必要なデータは準備できていますか。それから費用に関してですが、これは有償ペースと考えておいて、よろしいですか」

和村のいい方はあくまで用心深げだった。小川は大きく頷き、アタツシケースから部厚い綴りの書類を引き出し和村の前に示した。和村は書類をパラパラとめくり、考え込むような表情をつくった。

「ほほう、メキシコですか。しかも太平洋岸に海底ガス田ですか。これは驚きました。初めて聞く話ですな。今、多田という担当者呼びますので、ちょっとお待ち願いますか」

メタノール事業化開発チーム、その責任者が多田芳郎^{ただよしろう}だった。多田の机の電話がなったのは、ちょうど技術データの整理に追われているときだった。まだ六月末だというのに真夏を思わせるようなきつい日差しがプロジェクトチームの部屋に差し込んでいた。

プロジェクトチームはニックビルの七階にある。あまり無駄話をするような雰囲気はない。部屋はいかにも研究者の集団らしく、知的な緊張感に包まれている。プロジェクトチームの編成は総勢二十人。彼らはメタノールに関するニック社の頭脳集団だった。

天然ガスからメタノールを製造する技術としては、スチーム・リフォーミング法といって、天然ガスを蒸気圧力で一酸化炭素と水素に分離、これを触媒を用いて合成する方法がある。こうして合成されたメタノールは常温常圧で、しかも液状の形で大量の備蓄、大量輸送など取り扱いが容易であるため、液化天然ガスな

どとも充分に競争できた。だから利用できる分野は広い。それが天然ガス系メタ

ノールが注目される理由だった。

メタノールの技術開発のうち、最大の関心はガソリン代替燃料にあった。ニツクのメタノール事業化研究開発チームが取り組んでいるのも、このガソリン代替燃料の開発だった。製造プロセスの基本的な問題はすでに解決している。最初はニツク社が西ドイツのコール・リソーシズ社の開発した「コーズ合成プロセス」をベースに、火力発電用の燃料開発に取り組み、成功を収めた。

問題はやはりガソリン代替燃料の開発だった。供給される原油が重質化の傾向を強めていることも、メタノールガソリンの開発が急がれる大きな理由だった。ニツクでの研究開発は二方面作戦が採られていた。

ひとつはメタノールエンジンの開発だったが、これは日東自動車と共同研究の形を採って、開発を進めていた。一方、多田のプロジェクトチームは高オクタン価で熱効率の良い、自動車用代替ガソリンをいかにして経済的に生産するか、その製造プロセスを確立する技術開発を進めていた。

この研究開発に多田は情熱のすべてを注ぎ込んでいた。エネルギー情勢は日まじに厳しくなっている。石油に替わる新しいエネルギー源を開発すること、それが技術者に当てられた社会的使命だ、という突き詰めた思いが多田にはあった。が、ニツク社の研究開発を統括する和村には、管理体制を強化することで研究業績をあげようとしていた。それがもつとも効率的な方法だと和村は思い込んでいた。るようでもあった。

滑稽千万だと、多田は思う。そんなことでは柔軟な物の考え方など決して生まれはしない。だからこの研究所の沈滞ぶりといったらひどいものだ。多田はこの研究所をだめにしたのは あいつだ とさえいったことがある。多田は今では、和村に対して怒りに近い感情を抱いていた。が、専務殿の呼び出しとあっては、多田の立場では我儘を通すわけにもいくまい。多田は目立たぬようにして席を立ち、階段を使って、できるだけゆっくり二階の接客室に向かった。

「紹介しましょう。メタノール事業化研究開発チームの多田次長です」

和村はことさらきばったいい方をした。眼鏡の奥で細く光る目が相変わらず用心深げにせわしなく動いている。小川は軽く頷き、名刺を差し出し、「小川です」と短くいった。

多田は小川を不思議な人物だと思った。どこか無国籍の臭いがする。小川の名

刺を改めてみて なるほど と合点した。それにしてもなぜ、メキシコで大学の先生を務める男がメタノールなんぞに興味を抱くのか、奇妙に思えた。多田は露骨にそういう意味のことを聞いた。

「もちろん、私の本業は大学の教師です。大学教師の私がなぜ、こんな話に首を突っ込むのか、その動機のことに関していえば、ざっくりいって愛国心と考えてもらって結構です」

これは予期せぬ回答だった。並の人間の感覚からいえば、かなり気恥ずかしいいい方である。小川はそれをさらりといつてのけた。さらに多田は個人的な事柄に属することを、いくつか質問した。技術者というものはある意味でたいへん無神経な人種である。多田もその典型の一人である。が、当人たちにとって、これはけっして不愉快なやり取りではなさそうだった。

「どうみてもあなたは日本人だ。そうすると国籍を捨てたということですか」
「そうです、私はメキシカンのつもりです」

この奇妙なやり取りに和村は苛立ちをみせた。和村の細い指が小刻みにふるえている。その細い目は、露骨に多田を非難していた。和村は大きく咳払いをして、二人の話に割って入った。

「小川さんは日経連の鎌谷会長の紹介でみえられた。で、メタノール製造プラントの企業化調査を私どもでお引き受けすることになったわけだが、小川さんは少し技術的な問題に関して、話を詰めておきたい、そういうことで今日、こられた。それに本件に関しては並木副社長も承知されている」

和村のいい方はこの無神経な部下に対して、ことの重大さをいい聞かせる含みがあった。それはいわずもがなのことであろう。だが、ことさらに並木副社長の名前をあげるあたりに、この場合は意味があるようだった。並木副社長は、次期社長の有力候補として評判が高い。和村はその直系であることを自認していた。周囲の人間たちもそのような目でみていた。多田は またか と思い、からかいたい気分になったが、やめることにした。

「失礼しました。さっそくですが、本題に入らせてもらいます」

小川はなんのこだわりもない様子でそういった。

「そうして下さい」

和村は細い顔を頷かせ、眼鏡を指先でずりあげながら話を促した。

「発注者はパナマに本社を置くパシフィック・ツール・エネルギー・コーポ、略称パテックという会社でして、まあ、メヒペトロの海外におけるダミーです。フィジビリティスタディの費用はこのパテックが負担することになっています。私の立場はメヒペトロのコンサルタント、代理人と考えて下さい」

多田は先ほど、小川がアタツシケースから取り出した書類に熱心に目を通し始めた。かなり手際よくまとめられたレポートである。大規模のガス田のようだが、これには肝心なデータが抜けていることに多田は気がついた。あるいは故意にデータを抜いているのか。

「これは雄大な計画ですなあ、それでメタノールと一口にいいますが実際のところ用途はかなり広い。市場としてはどういった分野を考えておられるのか、お聞かせ願えますか」

「まず、自動車向けのガソリン代替燃料を検討したいと思います。だいたいの規模は日量五万トン、ですからラインは全部で十系列、一系列当り五千トンのプラントを考えています」

基本的な発想、これはいいと多田は思った。たいていの場合、これだけ規模の大きい天然ガスを開発するということであれば、液化ガス計画を構想するのが普通だった。

液化ガスの場合だと、最初にユーザーを固定するので、あとはほうっておいても製品は売れるので市場対策が楽だった。だから発展途上国などでは、たいてい液化計画が進められていた。しかし、天然ガスを液化することは開発の側になった場合、おもしろ味がある計画とはいえなかった。

なぜかという、需要家との関係がタイトにならざるを得ないため、その後の新規事業の展開が大きな制約を受けるからだった。これに対して、ガソリン代替燃料の場合だと、フレキシビリティが大きい。たとえば化学原料への転換なども容易に進めることができるからだ。

時流からいえば、天然ガス開発は液化ガスの方向にあることは間違いないが、開発当事者、つまりサプライヤーの立場に立った場合、自分としても代替燃料を選択するだろうと、多田は考えた。それにしても、馬鹿でかいプラントである。

「ずいぶん大規模な設備になりますね。プラントの稼働率を八割と計算したとしても、年産一千万トンのメタノールが生産できる。これをバージ式のプラント

として建設するということですね」

今、世界で動いているメタノール・プラントの生産能力は、全部合わせても三千万トンをわずかに上回っているにすぎない。考えてみれば、多田たちの研究グループが、メタノールを担当した頃の需要といえば、せいぜい数万トンの規模だった。いくらなんでも、ひとつのプロジェクトで一千万トンを超えるプラントを建設するとは、かなり冒険であった。それにこれをバージ式で建設するということはこれまた画期的な計画である。

「バージ式とすることを考えたのは、工期を短縮するのが狙いです」

小川はそう答えた。バージ式にすれば、設備のほとんどを日本で生産組立てすることが可能である。それを現地まで船で曳航^{えいこう}して、据えつければよい。そうすれば厄介な現地工事も短縮できるわけだ。とくに何かの都合で工事を急がなければならぬ場合など、この方式が採用されていた。だからバージ式プラントを選択することにしたのだ、と小川はいった。

「ご承知かもしれませんが、ガソリン代替燃料としてのメタノールは、技術的にいいまして、少なからず問題があります。その最大の問題は石油系ガソリンに比べて、発熱量が極端に低いということです。オクタン価をいかに高め、これを熱効率のよい燃料に変えるか、これが私ども技術者の課題です。それにメタノールとは厄介なものでして、内燃機を腐食するという問題もある」

「それは存じています。しかし、ニツク社の技術は世界的にみても、高い水準にある。たとえば、ディーゼルエンジン用の燃料でしたら現在の技術力で充分対応できるのではないかと、そう私は思います。ガソリンエンジンにしても、自動車メーカー自身が新素材を採用するなど、内燃機の改良に努めていると聞いていますし、このプラントが動き出すころには実用化されている、そう思うのですが、いかがなものでしょう」

「おほめ頂き恐縮です。そこですが、この種のフィジビリティスタディの場合ですと、建設総額の十パーセントから十五パーセントが相場です。つまり費用の問題ですが、そのあたりの話も伺っておきたいと思うのですがね」

和村は足を組み直しながらそういった。

「専務、その話は契約交渉の際にして下さい」

多田はきつい語調でいった。話には順序というものがある。まだ、なにを引き

受けるのか、話は済んでいないではないか。多田はそういうことをいいたかったようである。和村は一瞬、言葉を呑んだ。そして細く鋭い目が、眼鏡の奥で異様に光った。多田はかまわず言葉を続けた。

「これだけの規模のプラントを建設するというのであれば、やはり問題は天然ガスの埋蔵規模です。いったい、どういう方法で埋蔵量を確認したのか、これが第一の問題。第二の問題は天然ガスの組成など、できるだけ詳しいデータを提示して頂きたいということです」

多田が指摘したことはプロジェクトの経済性と技術的な問題を検討する場合、つまりフィジビリティスタディを実施するとなれば、最低限確認しておかなければならないデータである。不思議なことに、小川が提示したドキュメントにはそれが記載されていなかった。このレポートだけでは不十分である。多田はそのことと改めて小川に問い直した。

「もつともです。ここに詳細データが揃っていますのでこれで充分かどうか、検討して頂ければと思います」

小川はそういって、今度は別な書類を多田の前に示した。それは鉱区の図面と地質に問するデータであった。それには天然ガスの組成を分析したデータも添えてあった。鉱区の概念図から判断すると、サイトはバハカリフォルニア半島の突端に位置している。サンルカス岬から百キロ程度の距離であろうか。海底ガス田であるが、海岸からそう遠くはないようだ。この地図で見える限りでは、立地条件はそう悪くはないと思えた。

「ほーっ」

と多田は唸った。こんなところにあつたのか。正直いって、想像もしていなかったことだ。が、考えてみれば、思い当ることはある。メキシコ沿岸ではかつて、メジャーと組んで、石油開発公社が石油開発を進めていたことがある。地図を見ると確かにあのあたりだ。だがあの計画は失敗に終わったはずだ。そうだとすれば、不思議な話である。多田は無遠慮にそのことを聞いた。小川は、「ご想像の通りです」と答え、言葉をつないだ。

「このデータはシークレットとして取り扱って頂きたい。ご指摘のように、このガス田はかつて米国のメジャーが開発を進めていたもので、彼らが途中で放棄したガス田です。ですからこの天然ガスの開発は、できればメヒペトロが独自に進

めたいと考えています。ですから非常に微妙な問題があるわけですし、そのところを理解頂きたいのですが」

多田は真剣な表情で頷いた。和村もこのデータを身を乗り出し、喰い入るようになりつた。なるほど、そういうことか。いろいろと事情があるらしい、と多田は思った。が、仕事はおもしろそうだ。そばに坐る和村の表情にはどこかためらいがのぞいていた。

「機密保持は私どものようなエンジニアリング企業にとりましては、当然の義務と心得ています。その点での心配はありません。ただですね、技術屋の立場からいいますと、立派な計画をつくるためには、できるだけ完全な形でデータを頂きたいということですよ」

「それは多田さんのいわれる通りだと思います。私が持参したデータでは不十分であることもわかります。どうでしょうか。メヒペトロのテクニカル・ミッションが、来日する予定ですので、そのときに詳細な技術的な検討をお願いできないものでしょうか」

「結構だと思います。で、テクニカル・ミッションはいつごろ、こちらにこられるのか、日程は決まっておりますか。それからですね、これだけ大きいプロジェクトですからどうしても現地を實際にみておく必要がある。その手配はお願いできませんでしょうか」

「八月か九月ごろの予定にしています。ミッションにはパテック社のレピカ社長も同行することになっていきます。ご存知かもしれませんが、彼は前のメヒペトロ総裁で、彼がこの問題の実質的な責任者です。現地調査のことは私も同感です。その問題に関しても、そのときに決めたらどうでしょう」

「当面はそういうことでよろしいかと思いますが、エンジニアリング作業が最終段階を迎えますと、現地調査のほかに天然ガスのサンプルが必要となります。これはですね、燃焼テストが必要だからです」

技術的にまづたくの素人のはずの小川だったが、多田の質問に対してきばきき答えていた。小川と多田との間で実務的な話がどんどん進んでいった。だから側に座る和村にはなかなか出番がまわってこない。和村は二人の話を途中で割るようにして、話した。

「契約の条件に關してですが、これは本社の営業部門と協議して頂きたいと思

います。ただ予めはつきりさせておきたいことは、今回のフィジビリティスタ
ディが本格的なものであるのか、それとも予備調査程度でよろしいのか。そこを
はつきりさせませんと、費用がどの程度になるか見積りができないものでして
和村がいうように研究部門には契約権は与えられていなかった。だから契約条
件に関する問題は、営業部門と協議して決めなければならぬという仕組みにな
っていた。また、プレフィジビリティスタディか、本格調査であるかによって、
かかる費用も桁違いに違ってくるはずだ。そのことは契約問題に微妙にひっか
ってくる。

「ニック社をコンサルタントとして選任したい。そのように考えています。です
からお願ひしたい作業はプロジェクトの経済的成否の検討、技術的問題の検討、
さらにデザイン、エンジニアリングなど入札作業に関わるすべての問題が含まれ
ます。差し当って急いで頂きたいことは、プロジェクトのアウトラインを確定す
ることと、概算費用を算出することです」

コンサルティングか……

和村は満足そうに頷いた。日本エンジニアリングは、肥料プラントや石油化学
プロジェクトでは、国際的にも名の知れたエンジニアリング企業であるが、実際
のところコンサルティング事業ではそれほど大きな実績を持っているわけでは
ない。が、ニックはできるだけ上流部門での仕事をやるべきだ、とは並木副社長
が社内で常づね強調していることでもある。和村はそのことを考えていた。

しかし、そうはいつでもコンサルティング業務を引き受ける場合、いくつか問
題がある。問題の第一は、これを引き受けるとコントラクターの資格を失ってし
まうことだった。つまりコンサルタントはコントラクターを兼務しないというの
が、この世界での商習慣となっていたからである。これだと、ニック社にとって
はおもしろ味のない話となる。

なぜならば、コンサルティング・フィーは建設費に比べて、ごくわずかな金額
にしかならない。せいぜい建設総額の十パーセント程度が常識的な線だった。そ
れにニック社自身がハード指向の強い企業体質を持ち、並木副社長がいうところ
のソフト化を目指す企業戦略が定着しているとはいい難い状況にあった。そのこ
ともこの仕事を引き受ける場合、もうひとつの問題だった。

「お申し越しの件はお引き受けすることが可能だと思えます。ただ、私どもは技

術部門でありますので、コンサルティングに関してお引き受けできるかどうか、最終的には営業部門と協議の上回答させて頂きたい」

和村は言葉を選びながら慎重に即答を避けた。もつとも、契約当事者がコンストラクションに関して、別契約を交わすことが可能かどうか。パテック社がプロジェクト本体を特命発注するというのであれば、今回の事前調査は無償で引き受けてもかまわない。和村はそうした意味のことをいった。

「現段階ではそこまでは約束することはできません。とりあえず、プレフィジビリティスタディは有償であつてもかまわない。ただ、概算費用の積算作業だけは急いで頂きたいのですが」

「そうすると、まず最初にこのプロジェクトのスコープ・オブ・ワーク（作業見取り図）を確定することが必要ですね。その作業はテクニカル・ミッションが来日した際に行なう、そういうことでよろしいですか」

そういったのは多田のほうだった。要するにテクニカル・ミッションがきてから作業を初めてもよいのか、多田が聞いたのはそういうことだった。小川は少し考えてからいった。

「まだ。正式には決定していませんし、ニック社の都合もあると思いますので、詳細は、テレックスか手紙で打ち合わせをしたいと思います。ところで、プロジェクトのスコープをまとめる作業がどのくらい時間を要するのか。私どもの希望としては、できるだけ早くその作業を仕上げて頂きたいと思います」

「頂いた資料やデータがプロジェクトのスコープを固めるうえで、十分であるかどうかもちつくりと、検討しなければなりませんね。なにしろこれだけのビッグ・プロジェクトですから慎重を期したい、そうですね、やはり三カ月はみて頂かなければなりません」

「三カ月ですか……急ぐことはできませんか」

小川は考え込むような表情をつくつた。傍らで二人の話を聞いていた和村が多田に向かつていった。それはきつい命令の語調だった。

「テクニカル・ミッションがこちらにこられるのが二カ月後だ。それまでに、どうしても全体のスコープだけは固めておく必要がある。そうしないとせっかくおいで願ったとしても、話にならないのじゃないかね」

どう考えても無理な注文である。なぜ、そんなに急がなければならないのか。

たぶん、和村と二人だけだったら、こんな無茶な注文はその場で拒否したことがある。が、多田はそうはしなかった。この話には久びさに気分を高揚させるような何かがある、多田にはそう思えた。

「いや、まったく恐縮なお願いで、申しわけありません」

小川は膝に両手を置き、低く頭を下げてそういった。小川が腰を上げようとしたとき、正午を知らせるチャイムがなった。和村は「社内食堂で恐縮だが」と、昼食に誘ったが、小川はそれを丁重に断って、持たせてあったタクシーに乗った。外は蒸せかえるような暑さだった。遠くで蝉の声が聞こえたのは、小川には錯覚のようにも思えた。蝉の季節にはまだ早い。が、梅雨のない今年は一気に真夏に入ろうとしているようだった。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争（八）

気難しい人物

杉田望

児島卓也は相変わらず不機嫌な顔付きで、デスクに向かい書類に目を通していているところだった。その姿はいかにも高級官僚として出世街道をまっしぐらに走り抜けてきた男の威厳がある。

児島自身は他人が思っているほど、気難しい性格の人間ではないのだが、無口な性格と生まれつきのいかつい顔立ちが、他人にはちよつと近寄り難い雰囲気をつくっていた。

だが、若い時分、社会の不正に憤り、マルクス経済学を信奉する純真な学徒であったと聞いたら世間の人は驚くに違いない。なぜかといえば、戦後、



経済官庁から防衛庁に転じてからは見事に変身を遂げ、右派世論形成の強力なオピニオンリーダーの一人として、世間では名が知られていたからだ。

児島は角張った顎を強く引き、熱心に書類を読んでいた。かすかにドアを叩く音が聞こえた。児島は振り向きもせずに行った。

「入りたまえ」

姿を見せたのは、山元竜夫だった。山元は一瞬、場違いなところにもきたかのように戸惑いの表情を浮かべた。部屋のつくりは広い。優に三十畳はあるつか。児島の執務机は窓を背にした奥まったところにあった。机の前には、革張りの豪華な応接セットが据えられている。上場企業でいえば、さしずめ社長か会長といった役どころの部屋のつくりだ。

「まあ、かけなさい」

児島は坐るべき場所をさし示すわけでもなく、書類に目を通すそのままの姿勢

でいった。山元はそういうことには、こだわらぬ性格である。さつさとソファに身を沈めていた。ゆっくりと足を組み直し、視線を児島の方に向けた。あれから十年近くになる。が、児島はといえば、相変わらず精力的で、いささかの衰えもない。

急な呼び出しだった。それはまた、山元にとって非常に珍しいことだった。この俺に何の用事があるというのか、山元は奇妙な思いにとらわれた。

「メキシコに関する君の報告に目を通しているところだった。それで、ひとつ君の意見を聞かせてもらいたいと思って来てもらった」

山元は一瞬ぎくりとした。メキシコの話といえば、小川と会ったのが先週の金曜日のことだ。それにしても児島が突然、メキシコに関心を抱くということは、正直いって山元にとっては解げせぬことである。

「どういうことでしょう」

「ここに書いてあることだが、世間の評価とはだいぶ違うようだね」

「そうでしょうか」

山元は素気無い返事を返した。いったんは閑職に追われた身である。児島に呼び出されるということは、復権のチャンスかもしれない。普通だったらそう考えるものである。だが、山元のものいい方には、どこか刺とげがあり、挑戦的な響きがある。受ける児島のほうも、そうした山元の態度を特に気にしているふうでもないようだ。児島は続けていった。

「メキシコ経済が破綻をきたしたのはアメリカの強硬な対メキシコ政策にあるとここには書いてある。ということは、対メキシコ政策が変われば、メキシコ経済は再建が可能だということになる」

「その通りだと思います。たとえば、米国の対メキシコ資本投下の流れをみても、ピーク時の八五年には年間三十億ドル近くあったものが、昨年の実績でいいますと数千万ドルに激減しています。これはアメリカの対メキシコ経済制裁によるものであり、その結果、メキシコ経済は重大な打撃を受け、再建が困難になっている、僕はそう判断します」

「米国の対メキシコ投資が激減したのはその通りだ。だが、それはアメリカがメキシコを魅力のない市場だと見切りをつけたからで、いわゆる対メキシコ制裁問題とは関係がないと思う。たとえば、いくら掘っても石油がでない、それも一

つの理由だが、それに加えてメキシコ政府は資源政策に関してあまりにもかたくなである、そうしたことが投資魅力を失わせることになった、そう考えるのが妥当だ」

二人はいきなり議論を始めた。児島のいい方は皮肉で攻撃的だった。山元の方も猛然と応じた。相変わらずだった。

「メキシコ経済が停滞している理由、それは対メキシコ制裁が唯一の原因であるとは書いていません。正確に言えば資源開発の失敗など、いくつか問題が複合的に重なり、経済活動の活力をそぐことになった。そこにアメリカの対メキシコ制裁が加わって、そのことが弱り切っているメキシコにとっては、駄目押しの打撃を与えた、ということです」

「しかしだね、君は報告書に、少なくともアメリカを含む北側箇国が対メキシコ政策を転換すれば、メキシコは急速に立ち直ることが可能であると書いている。つまり我われ北側が、どう対メキシコ政策を変えればよいのか、そこが問題になるはずだが、君は資源開発の可能性を再検討してみるべきだといっている。その根拠をぜひ聞きたい」

「そう、石油開発の挫折が直接の原因です。七〇年代の後半からメキシコでは石油に基礎をおいた工業開発を進めてきた。なるほど、メキシコ湾岸や内陸での石油開発はそれなりの成功を収め、それが工業化計画を押し進める機動力になったことは事実です。だが、世界的に注目を集めていた太平洋岸での石油開発は米国メジャーの意図的な撤退によって、失敗に終わったことはご承知かと思います。問題はこの国の経済開発計画が過度に石油資源に依存して立案されていたことで、石油がないということであれば計画自体を放棄せざるを得ない、それが今日の経済的困難をもたらしている大きな要因です」

「メジャーの意図的な撤退ね、なるほど、それで」
「すべての工業化計画が石油開発の成功を前提として立案され、たとえばインフラストラクチャーの整備から始まり、直環製鉄計画、火力発電所建設、石油化学計画などいずれも石油を当てにした計画だったのです。だから石油が出ないとなればこれは悲惨です」

「上流の水が枯れたのだから、下流が枯れても不思議ではない。それに世界的なインフレーションの影響もあった。土台、メキシコの工業化計画は体力の限界を

超えた無理な計画だった。その点では君の意見に異論を挟むつもりはまったくない。そこでだ、僕が聞きたいのは、先はともいったようにメキシコの資源問題をもう一度再検討してみることが、経済再建の前提ではないかと君が書いていることだ。はたしてそうなのか」

山元を促すように児島はそういった。金枠の眼鏡の奥で、鋭い目がきらりと光った。二日前、「呑気」で小川が話した天然ガスのことが山元の脳裏をかすめた。それに小川はあの夜、わかれ際に この話はアメリカ筋に漏れるのはまずいともいつていた。

やはり、児島はあのことを知っているのかもしれない。第一、児島は米国の情報機関とも親しい関係にある人物だった。まさかとは思うが、これは用心せねばならないと山元は思った。山元は言葉を慎重に選びながらいった。

「メキシコを工業化という蟻地獄に引きずり込んだのもアメリカですし、メキシコから手を引き、この工業化路線にダメージを与えたのもアメリカです。そこには大国の身勝手さがある。問題にすべきはその結果のこととして、メキシコには膨大な借金だけが残った。ですからメキシコ経済を真に再建しようというのであれば、そうしたあり方を再検討しなければならぬのは当然だろうと思います。所長は深読みし過ぎというものです」

「そうだろうか。ここに書いている内容は、それだけでなさそうだと僕には思える。君の報告書では確かに資源の存在そのものに直接には言及していない。だが、文脈からいえば、資源の可能性を再度見直し、その上で経済再建を考えるべきだということになる」

児島がいったことはマトはずれではない。その通りだった。山元が書いた報告には直接には資源の存否には触れていなかったが、文脈から判断すれば、児島の理解の方が正しい。それを児島は鋭くついてきたのである。さらに児島は言葉をつないだ。

「それだけでなく、この報告書に添付されているこのスクラップ。これはいったいどういうことを意味するのかね。ソ連の原子力潜水艦が中南米にまで勢力を広げているとは、実際のところ驚いた。が、あまり日本では大きなニュースとして取り扱われなかったようだ。これは軍事的にみても興味深い記事だが、もう一つ興味深いことは事故を起こした場所だ。つまり、ここはかつて石油開発を進めて

いたところであるということだ。僕も君と同様に、この記事に関しては別な観点から興味を持ったのだが、どうだろう」

児島はそういって、ソ連原潜の事故を伝えるスクラップのコピーを山元の前に突き出すようにして示した。そして満足そうに頷いた。

「資源存否の可能性をもう一度再検討してみたらどうかという根拠は、この原潜事故にあると考えていいのだね。君はそこまで書き込んではいないが、論理をそうつなげば論旨はすっきりと通ることになる。なるほど、たったこれだけの記事から想像力を膨らませたというわけか、その洞察力は敬服に値する」

これは何もかも知った上で、話をしている。山元はそう判断した。児島は相変わらず不機嫌な表情を崩してはいないが、内心は満足そうだった。

だいたい、山元の存在自体、例の事件以来、児島にとっては頑固な奴だぐらいいしか記憶に残ってないはずである。児島は千人を超える研究員を抱える大研究所の責任者だ。だから新聞の整理に当たっている山元が、どんな報告をつくったとしても児島の目に止まるはずもなかったし、実際、山元はこれまでまったく無視された存在であったのだ。

が、児島が山元の調査報告書に着目したのはまったくの偶然ではなかった。児島がメキシコの問題に改めて関心を待ったのは、経済団体が催したパーティのことだった。そのパーティというのは、児島が来賓として出席した官民共同出資による北極石油開発の設立パーティのことだった。その席で児島は千代田銀行の石井頭取から思いもかけぬことを聞かされた。

「鎌谷さんはまたメキシコに熱を上げ始めているんですよ」

「リスケ問題で金融業界が騒いでいるというのに、今どきメキシコでもないですよ。で、何か具体的な案件でもあって、動き出しているということですか」

「はつきりはわからなかったが、エネルギー資源に絡む話し振りだった」

そのとき、顔見知りの新聞記者が二人のそばに近づいてきたため、石井頭取との短いやりとりはそこで終わった。石井頭取の渋い表情からみると、この話はどうやら鎌谷が石井に相談を待ちかけ、それで石井が重荷を背負わされることになった、と児島は想像した。それに鎌谷ともあろう人物が何の根拠もなく軽はずみに動き出すはずはない。そうだとすればメキシコについてはこれまでとは違った角度から見みる必要がある。児島はあのときそう思った。

それにエネルギー問題といえば、もうひとつ気になることがあった。それは中東情勢が再び激動し始める兆が顕著となっていることで、一週間ほど前にロンドンに出張した際、英国戦略研究所のロバーツ主任研究員と意見交換したときも、そのことが話題に上った。

中東問題に関していえばパレスチナ問題もさることながら、問題はイラン情勢であり、イランではホメイニ亡き後、革命派内部のさまざまな権力闘争が巻き起こっていた。とくに革命派のなかで追い詰められた過激グループが、次第に戦術をエスカレートさせ、それが周辺諸国にとって重大な脅威となっていた。彼らはそれが戦術的に有効であると判断されるならば、サウジアラビアの油田攻撃さえもやりかねない、ロバーツ主任研究員はそうしたことをいつていた。

ロバーツの見解によれば、イランの過激グループはいつさいの取引を拒否して、かたくなに世界的規模でのイスラム革命を遂行するであろうし、その場合、テロこそがもつとも有効な手段であると彼らは信念を持っているようだ。

しかし、困ったことに彼らが考えているテロとはハイジャックであるとか、要人の暗殺や小規模な軍事施設に対する攻撃といった、これまでの戦術の延長としてはなく、たとえば、核兵器を奪取することで、それを武器に相手にブラッフをかけ政治目標を達成する、そうした荒っぽい行動に出る可能性もある、と眉をひそめていつていた。

いつだったか、児島たちはこうした問題にどのように対応するのか、内閣調査室の依頼を受けて、シミュレーションを実施したことがある。だが、核管理を厳重にするとかいう平凡で誰でも考えられるようなことを提唱したのみで、実際のところ核ジャックに対する効果的な対抗手段はない。それが安全保障問題専門家たちの結論であった。

確かに今は石油供給過剰の時代だ。しかし、ロバーツがいうように過激派が核兵器を手にしてサウジアラビアの油田を攻撃するような事態が起これば、サウジに対するエネルギー依存度が高いだけに、世界経済はたちまちのうちにパニックに陥ることは必然である。

だが、世間はそのことに、十分な注意を払ってはいなかった。エネルギー資源の供給多元化の課題は、古くて新しい課題でもあるのだが中東の危機が現実だとすればメキシコのエネルギー資源をもつ一度考え直してみる必要があるのでは

ないかと児島は考えた。

児島は今日、すべての約束をキャンセルして、朝から所内にあるメキシコに問する資料を読みあさった。そのなかに山元が書いた調査報告書を発見したのである。読んでいるうちに、児島は唸り声を上げた。改めて筆者をみると、それが山元だった。

そうか、中国問題で頑固に抵抗した奴か。考えてみれば中国問題に関する見通しは、結果として奴さんの見通しの方が正しかった。このメキシコに関する報告書もいわゆる世間の評価の仕方とはだいぶ異なった見解に立ち分析をしている。すっかり忘れていた山元のことを児島は思い出した。

「ずばり聞くが、実をいうとあるところでメキシコに隠し油田が存在することを耳にした。で、君のこの報告書との関連だが、山元君はそのことを承知でこの報告書を書いたと判断してよいんだね」

やはり児島は知っていた。どう対応すればよいのか。山元は困惑した。ただ児島が 隠し油田 といっていることからみると、全容は把握していないと判断してよさそうだ。それにこの報告書を執筆したのは小川と会う数週間前のことであるので、小川から聞いた情報を材料としては使っていない。それが救いだと思っ

た。

だからこれを山元自身の想像力の所産だといっても嘘をついたことにはならないはずだ。友人との信義を裏切らなければならぬようなロイヤリティを、この研究所から負わされた覚えはない、とも山元は思った。

「その可能性は否定しませんが、所長が想像されているようなこと、つまりエネルギー資源の存否に関していえば、あるともないとも確信をもっていえるだけの材料は、残念ながら持ち合わせていません」

「それではその可能性というやつを、君自身の手で調べてはくれまいか。費用はいくらかけてもかまわないし、人手が必要であるというのであれば、経済研究部から二、三人引き抜いてもかまわない。人の手配のことは僕の方から根本君に話しておくことにする。調査の期間はだいたい、四週間を目途にエネルギー資源の存否を明確にしてもらいたい」

児島は少し考え込んでから、あっさりそういった。話の流れからしてそういうことになることは容易に想像できた。山元は引き受けるべきかどうか迷った。

結論はすでにわかりきっている。ここで拒否すること、それは辞表を出すことを意味した。が、小川との友情は裏切れない。話は断わることにした。

「せっかくですが、これは引き受けることはできません」

山元がそういったとき、児島は突然大声を上げて笑った。山元にとってこの研究所に入ってから初めてみる児島の笑い顔だった。なにか不気味ですらある笑い方だったが、心底から笑っているようでもある。山元にはなにがおかしいのか理解できなかった。

「いや、悪い悪い。君はあのことを気にしているのか。それだったら僕の方が謝罪してから頼むべきだった。例の中国の調査に関しては、確かに君たちのいったことが正しかった。それに君の処遇に関しても、僕の方の手落ちがあった」

なんとも月並である。これには驚いた。が、山元がなぜ断ったかは児島にはわかるまい。当り前といえればそれまでだが、たとえ友人との約束ごととはいえ、飲んだ席での約束を守るために、辞職するなどとは考えられないことに違いない。

「結構、今の仕事は楽しくやらせてもらっています。僕がお断り申し上げたのは所長がいわれたような理由ではなく、まったく関係のないことです」

「そうか、あの件で君をそんなに傷つけたとは考えてもみなかった。すまんことをしたと思っている。しかし、この件は君にせひともやってもらわなければ、やれる人間がこの研究所にはいない。これはこれとしてあのときのことは水に流してもらえないか」

えらく丁重だった。児島にも山元がここで断ることは、退職を決意した上でのことだとは容易に想像できた。そうになると、山元のことを急に惜しくなった。人間関係に配慮が欠け、いかにも気難しい男だが、仕事をやらせれば抜群の能力を発揮する。惜しい男だ。

「例の件でしたら別に気にもしていません。実際、今の仕事は楽しくやらせて頂いている。断る理由は個人的なこととして、勤め人としては許されない捉官だということに理解して下さい」

「わかった、今ここで結論をだすのはやめよう。いっておきたいことは、これは国益にとつて重要な問題だということだ。突発的な事故が起こり、石油供給が途絶えた場合、これはえらいことになる。現在の中東情勢はそうしたことを予感させる不安がある。だとしたら平時から準備が必要だ。メキシコに対する僕の関心

は、率直に言ってそういうことだ」

児島は自分にいい聞かせているようでもあった。児島のいうことは山元にも理解できる。エネルギー過剰時代は、やがて供給タイトの時代に変るのではないか。たとえば『ミドル・イースト』など中近東専門誌は、中東情勢が極めてあやういものとなっていると伝える記事を、最近やたらと多く流している。山元はそうした動きを早い時期からウオッチしていた。

が、児島の本当の狙い、それがどこにあるのか。山元には読めなかった。それに児島がいったい、この話をどこで聞き込んできたかも山元には興味があった。それは米国筋の情報なのか、それとも別なルートでもあるのか。そう考えると、無下に断るべきではない。どうすべきか山元は正直いつて迷った。

「で、所長は隠し油田とかいう話をどこで聞かれたのですか」

上司に対するものの聞き方としては無遠慮にすぎる。まさか答えはすまいと思つた。児島は一瞬たじろぎをみせたが、意外なほど、あっさり答えた。ソースは日経連の鎌谷会長だ、といった。

山元にも思いあたるところがあつた。あるとき小川は日経連にたちよつてから丸ノ内ホテルにきたとかいつていた。符合する。児島の話聞くうちに山元は次第に自分の気持ちが変わってくることに気がついた。

「少し考える時間を下さい」

児島は「そうしてもらつとありがたい」とだけいつて、安堵したように頷いた。たぶん、この仕事を山元が引き受けることになるだろうという確信を持った。それにしてもこの気難しい男が、なぜ態度を変えたのか、児島には理解のできないことだった。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争（九）

杉田望

債務不履行問題

午前七時五十分。ニューヨーク行き
のボーイング707は定刻にベニト・
ファレス空港から離陸した。今田はセ
フティベルトをしっかりと締め、また
たく間に遠ざかるメキシコ高原の大地
に目を落した。

思えば短い旅程だった。メキシコに
到着したのが先週の日曜日だったから
滞在期間はわずか五日間。そのわりには
充実した仕事ができたとともに、今
田には思えた。機体は水平飛行に入り、
視界からメキシコの大地が消えていっ
た。ファーストクラスには今田のほか
数人の客が乗っているのみで、思った
より機内はすいていた。

カルロスとの会談が思いがけず実現し、天然ガス開発計画の概要を把握できた
ことなど、メキシコ出張はまずまずの成果をあげることができた。今田は満足だ
った。そういえば、交渉の中味を電話で報告したとき、大園は珍しく上機嫌な声
を上げていた。

「それはよかった。で、さっそくだが、木内君はすぐに資料を持って東京に戻
ってくれ。それから君は、ニューヨークに飛んでくれないか。来週からメキシコ
債権国会議が始まるので、その様子を探ってもらいたい」

普通だったらご苦労さんの一言もあって、然るべきところだ。が、大園の場合
はこの程度のことです満足するような男ではない。すぐにニューヨークに飛べとい
うのがそれに代る言葉だった。

電話のそばで聞いていた木内は、抗うべくもないという表情をつくって、肩を



すばめてみせた。

大園の電話での話だと、メキシコ債権国会議は怪しげな空気だということ。そのことは秋野からも聞いていた。債権国会議が不調に終われば、天然ガス計画なんぞは画餅になってしまう。どうなるのか、その行方が気がりだった。いずれにせよ、ニューヨークに立ち寄りなければと、今田はそのつもりになっていた。しかし、大園のああいういい方は何か釈然としないものが残る。これも勤め人の宿命かと今田は自嘲的な気分になった。

ともかく木内はロス経由で、その翌日の午後の便で帰途についた。割りを喰ったのは今田だった。一日遅れでニューヨーク行きのパナムの座席をおさえた。メキシコ支店の秋野が機敏に動いてくれなければ、たぶん、二、三日は待たされる結果になっただろう。

順調にいけば夕刻にはニューヨークに到着するはずだ。スチュワーズに注文したミニボトルを開け、今田は臭いのきついバーボンを一気にあおった。疲れきった身体に、強いアルコールはまたたくまに広がっていく感じだ。どうも頭の芯がざわついてしかたがない。それにしても、不愉快な気分させられたのは船橋支店長とのやりとりだった。その光景が鮮やかによみがえってきた。

「カルロスは暇をもて余しておいでということかな。それにしてもわざわざ御臨席とは、これは驚いた。まあ、そう有頂天にならずに……僕だったら少し様子を見ることにするんだが、そう、副社長の御意向ということであれば、仕方がないだろうね」

今田たちが支店への挨拶を兼ねて、カルロスとの会談の中身を報告にいったとき船橋は皮肉な笑いを口もとに浮かべてそういった。まるで傍観者の立場である。今田たちに対する態度は悪意に満ちたものだった。なんという男だ、あのとき今田は心から怒りを覚えた。

いずれにせよ、カルロスに連なるアンジェト口政権が潰れるのは時間の問題である。だから

今の段階では、コミットは差し控えるべきだというのが、船橋がいたいことのようにだった。ただし、このプロジェクトを本社筋の仕事として進めるぶんには、メキシコ支店として特段意見を差し挟むつもりはない。が、積極的に支援することはできない、と冷たくいい放った。一緒にいた木内は、激しく船橋に詰め寄っ

た。船橋はまるで馬鹿にした態度で、軽くあしらった。

帰任すれば、重役の椅子が特っている。それなのにお前たちにつき合っただけな橋など渡れるものか、露骨にそういう意味のことさえいい切った。船橋はそういうことを平気でいえるタイプの男である。以前に比べて社内の空気がどこかなく、事なかれ主義の傾向を強めていることは、肌身に感じさせられることである。が、ああいうタイプの男が偉くなるようだったら、この一流半の会社もおしまいだ。そう考えると今田は陰惨にならざるを得ない。

だから秋野の立場は微妙だった。支店のなかで、こそこそ今田たちに協力する姿は、いかにも気の毒に思えた。それも支店長の方針ということであれば仕方のないことなのだろう。が、秋野もこのプロジェクトには何か感じるころがあるようだった。それが救いのように思えた。

二度目の機内食が終わっていた。その間にいったい、何本のボトルを空けたことになるのか。小瓶とはいってもアルコール度の強い酒である。酔いのためか、支店で味わったあの不愉快な気分が次第にうすらいでいくのがわかる。いくらか気分が高揚してきたようだ。

アタツシケースを開き、カルロスとの会談記録を読み返してみた。木内がメモを整理したものだが、要領よくまとまっていた。全体として話の筋道は通っている。これならば、いけそうだ。今田は何度も会談記録を読み返しながら満足そうに頷いた。最後に残る問題は、きつとファイナンスになるはずだと、今田は思った。

今田はいつのまにか、深い眠りに落ちた。すでにボーイング707はニューヨークの上空に達していた。機体はゆっくりと旋回しながら、空港に向かって着陸態勢に入った。眼下にニューヨークの灯が迫ってきた。深いため息がでた。奇妙な安堵感。機体が着地した瞬間、今田は思わず目をつぶった。いつもの癖である。

かなりの混雑だったが、入国手続きは迅速にすんだ。バツゲージを受け取り税関を通ると入国ロビーが広がる。たぶん白タクの運転手だろう。しつこく食い下がってきたが、それを振り切り今田はタクシー乗り場に向かって足を早めた。一瞬、背中に鋭い視線を感じた。監視されているような不愉快な気分である。思いきって振り返ってみた。

あつ、あの大男だ

今度は明瞭に思い出すことができた。視野に飛び込んできたのは、例の大男のアメリカ人だった。一瞬、たじろぎをみせたが、片目をつぶってにいつと笑った。照れ笑いのようなでもある。大男はアタッシューケースをぶらさげているだけである。軽装だった。大男の風貌は典型的なアングロサクソンの骨格だった。

「やあ、メキシコ・シティでもあったね」

大男はそういつて、今田に近づいてきた。今度は打って変わって、いやになれなれしい態度だ。背丈はゆうに一メートル九十近くはある。日本人の平均値からいえば、今田とてけつして背の低い方ではないが、こんな大男を相手にすれば圧倒されるのが当然である。顔は笑っているが、油断のない目配り、どこか威圧的な物腰。この大男はただのビジネスマンではなさそうだ。今田はどう対応すべきか迷った。

「そうすると、メキシコ・シティからずっと一緒というわけか」

今田は精一杯皮肉を込めてそういつたのだが、大男は一向に気にするふうではなかった。むしろきっかけを待っていたかのような素振りである。視線は相変わらず鋭いが、態度は屈託がない。

「そのようだね、君はファーストクラス。僕はエコノミーだ。それで気がつかなかったのかもしれない。ファーストクラスを利用できるとは、日本のビジネスマンはうらやましい。で、宿は決まっているのか」

「ああ……」

今田は曖昧に答えた。

「なんだったら、紹介しようか」

「心当たりがあるので、その必要はない」

「で、メキシコでの商売はどうだった」

「あそこは、ご承知のような状態だからね」

「そうか、やはりね。遅れたが、僕はエネルギー関係のコンサルタントをしているカール・ルピンスだ。で、君の名前を聞かせてもらえないか」

「僕はみでの通りのビジネスマンで、イマダだ」

面倒だから会社の名前を省いて、今田はそう名乗った。いつの間にか大男と並んで歩く形になっている。タクシー乗り場にはいくつかの列ができていた。流れは比較的スムーズだった。

「で、方角は？」

合い乗りでもするつもりなのか、カールと名乗った大男はそう聞いた。なんとなくうさん臭い匂いもしないではない。タクシーの待ち順は、あと数組みを残すだけである。面倒だから適当に答えることにした。

「ロックフェラー・センター近くのシエラトンにするつもりでいる」

「おお、そうか。実をいうと僕もその近所のホテルを予約しているんだ」

いずれにしても強引に割り込むつもりであるらしい。カールと名乗った大男のアメリカ人は、今田のバグゲージを軽々と持ち上げ、タクシーのトランクに放り込んでいた。それはあっと、いう間のことであった。かなり強引なやり方である。その上で改めて聞いた。

「一緒でもかまわないか」

最初から決めてかかったいい方だ。カールのやり方は有無をいわせぬ強引なものだ。まずいいことになりそうだと思っただが、断る理由も見つからない。今田の肩を抱くようにしてタクシーに乗せると、今度は自らタクシーのシートに深ぶかた身を沈めた。重い体重が車のシートをきしませた。

とうとう合い乗りということになってしまった。ケネディ国際空港から市内まで、二十分たらずの距離である。二人を乗せたタクシーは勢いよく走り出した。すでにとつぷりと日は暮れている。話してみると、そう悪い男ではなさそうだ。旅をしていると、こういうことはままあることだ。

「メキシコにはたびたびいくのか」

「いや、そうでもない。あまり馴染みのないところさ」

「今回のビジネスは、うまくいったのか……？」

今田は内ポケットからケントを引き出し薦めたが、カールはそれを断ってそう聞いた。聞き方に独特な粘りがあるように感じた。どうということのないやりとりではあるが、聞き方によって、尋問を受けているような感じにもなる。今田はちょっと不愉快だった。

「そうでもないさ。ちょっとした打ち合わせがあったもので、それで」

「あそこでの商売はたいへんだらう。経済情勢は悪いし、政情も安定していないからね。メキシコでは大規模なゼネストが準備されているようだし、あそこはリスクが非常に大きい。商売をやるのだった率直に言って、やめるべきだ」

なにやら忠告めいた響きのあるいい方をした。

「そう、経済事情は悪い。ただ、ゼネストなどという不穏な動きがあるにはイヤにのんびりしていたように思ったけど。ところで、あんたはどんな用事でメキシコに。商売で……？」

「エネルギーに関係したちょっとした噂があったもので、それを確認するためちよつとでかけたまでのことで、まあ、調査とはいっても実際にはたいしたことではなかったんだ」

「エネルギーだって……！」

今田はぎくりとした。よエネルギー問題に絡んだ出張だとすれば、もしかしてこの男は……と考えた。ありえない話ではない。気のせいかもしれないが、探りをいれるような目つきで、カールは今田をみた。なにかしやべっていないと落ち着かない気分になった。

「エネルギー関係というと……」

「うん、このところメキシコ原油の生産量の落ち込みが激しいものだから、生産の実態がどうなっているか。あるスポンサーからの依頼で、それを調べるため出向いたというわけさ」

「で、結論はどうだった」

「そいつは、スポンサーに限り報告することになっているので、まあ、簡単には答えるわけにはいかないね。わかってもらえらと思うが、コンサルタントというものは、信用が第一だからね」

カールはそういうと、意味ありげに笑った。それは意外性のまるでない答えであつたが、今田はなぜか安堵を覚えた。すでにラッシュアワーの時間帯はとうにすぎているのであろう。思ったほどの混雑ではない。が、タクシーの運転手は乱暴な運転をした。そのかわりスピードはべらぼうに早い。ポンコツのわりには、妙に安定感がある。話し込んでいるうちに、いつのまにかハイウエーを抜け、摩天楼がそびえ立つ、市街地に入った。

「話を変えるけど、エネルギー問題といえば、中近東の情勢がおかしくなっているようだね。今は供給過剰で、安値安定の原油価格も、中近東の情勢いかによっては激変する可能性がある」

そうした噂が専門家の間に流れていることは、今田も知っていた。カールがな

にを意図して、そんなことを話題にしたのか。初対面同士の世間話としては、不自然な話題に思えた。揺れる車のなかで、カールは話を続けた。

「たぶん、于不ルギー問題は今秋にかけて、異常に大きくクローズアップされることになる。それは中東問題との関連で、再度、危機が発生する可能性がある。あんたはこんな話に興味があるかね。それとも迷惑かな」

「いや、かまわないよ」

エネルギー関係のプロフェッショナルということであれば、これはコンフィデンシャル情報かもしれないと今田は思った。が、石油がそんなに切迫した状況にあるとは考えられない。むしろ現状は供給過剰にいかに対処するかで、問題が起こっていたからだ。

中近東、とくにホメイニ師亡き後のイランでは、大きな混乱が起こっていることは確かで、安定性に欠けていた。だが、趨勢からいえば、だからといって、それが中近東の安全保障に致命的な打撃を与えるとは考え難い。今田はそんな意味のことをいつてみた。

「それは多数派の意見のようだね。問題はテロリズムの横行だ。幸いにして人類は国家間の紛争に対処する一定のルールを確立することに成功した。が、狂信的集団によるテロリズムには、まったく無抵抗な状態にさらされている。仮にテロリストたちが、世界経済を混乱させる手立てとして、サウジアラビアの油田に攻撃をかけたらどうなる……！」

タクシーの右手にセントラル・パークがみえてきた。さすがにオフィス街は閑散としていたが、ブロードウェイに入るとニューヨークの賑わいが伝わってくる。ロックフェラー・センターはマンハッタンの中心部。この地区には二十余の超高層ビルが立ち並び、数多くの大企業や日本でも馴染みのタイム・ライフやマゲロウ・ヒルなど、世界的な出版・マスコミ関係の本社もこのあたりに集中している。

「ああ、このあたりで先に降ろしてもらうことにする。料金はダッチカウントとということでもいいな。それからこれは僕のネームカードだが、ここに連絡してもらえば、二十四時間以内にコンタクトが取れるようになってる。なにかあったら連絡をくれないか」

ちょうど、バーリントン・ハウスの近くを通りかかったあたりで、カールはタクシーを停車させた。今田に二十ドル紙幣を渡し、タクシーを降りた。カールは

一度振り返ると、右手を高く上げ、軽く振ってみせた。くるりと背中をみせると、そのままどこかへと姿を消した。

不思議な男だ。ずうっと、メキシコからつけてきたのではないか、そんな疑問がわいた。渡された名刺をみると、事務所はボストンにあるようだ。個人事務所であるためか、会社や所属する団体の名前はなし。肩書きはエネルギー・コンサルタントとあるのみだ。

また、会えるような予感がする。それにしても聞きたいことを聞き、しゃべりたいことを一方的にまくしたて、風のように消えていった。考えようによっては、今田と接触するチャンスをもキシコから窺^{うかが}っていたような気もする。今田にはそう思えて仕方がなかった。

今度のことをどこかでかぎつけたのではあるまいか、いや、そんなことはあるまい。不吉な予感が脳裏をかすめたが、今田は大きくかぶりを振って打ち消した。そのときちょうど、タクシーがシェラトンの正面玄関に停車した。

数回電話のベルがなった。だいぶ眠り込んでしまったようだ。シャワーを浴びると、少しまどろんでおこうかと思っただが、つい寝込んでしまったようだ。今田は備え付けのガウンを羽織ると、受話器を取りあげた。英語で答えたが、相手は日本語だった。

電話の声は千代田銀行ニューヨーク支店の今野優輔^{こんのゆうすけ}だった。事前にテレックスを入れておいたので、それで連絡をくれたのだろう。今野とは大学で同じゼミに属していた。成績は抜群に優秀だった。国家公務員の上級職試験に上位で合格した。だが、今野は役人には向かないといって、銀行に就職を決めた変わり者だが、仕事はできた。ニューヨークに駐在してすでに八年近くになっているはずだ。現地法人の総支配人として、プロジェクト・ファイナンスを手掛けていると、いつか会ったときに話していた。

「久しぶりだね。それで元気にしているか。で、今どこからかけている」「相変わらず、まあまあ仕事は適当にやっているさ。つまらん会議があったもので、遅くなつてすまん。それで今、このホテルのロビーから電話をかけているところだが、食事は済んでいるのか。よかつたらどこかに案内してもいいのだが」「それはありかたいのだが、もう十時になっている。この時間じゃ出かけるのも

面倒だね、できればホテルで済ませたいのだが、かまわないか」

「そうしようか。それじゃ、下のロビーで待つことにする」

エレベーターホールに今野の姿をみつけた。頭髪は六割方、白くなっている。グレーの背広に、えんじ色の幅の広いネクタイが映えている。髭の濃い長身の男だ。表情は相変わらず若い。

歩み寄って、握手を交わした。二人は並んで歩きだした。ロビー中央に地下に通じる階段がある。レストランは地下一階にあつた。シエラトンはニューヨークでも一流のホテルだけに、レストランもなかなかしっかりしたしつらえだった。かなりの混雑だ。案内係は十分ほど待つてほしいといった。

「メキシコからじゃ、たいへんだったね」

「慣れているのでそうでもないさ、それにしても何年ぶりだろうか」

「うん、三年ぶりということか。で、木内くんは元気にしているかね」

「つい昨日まで、メキシコで一緒だったんだ」

「そうすると、二人揃って出張ということか。何だね、君たちのような大物課長を派遣するところを見ると、こりゃあ、大きな商売のようだ。一口乗せてもらうわけにはいかないか」

屈託がない。邪気のないいい方だ。そのとき、案内係が、二人に席があいたことを告げ、奥まったテーブルに案内した。テーブルはキャンドルの灯で、揺れてみえる。今野はまずワインを注文し、次いでスモークサーモンとステーキを注文した。それにそれほど食欲がなかった今野は考えることも面倒だったので、今野の見立てに従うことにした。

ワインは辛口で今野の好みだった。ここでもカリフォルニア産が幅をきかせているようだ。スモークサーモンもまずまずの水準の味だ。ただ、ステーキにはいささか閉口した。まるで草履（そり）というほかない。まったく大きいただけが取り柄（とらえ）である。ゴムを噛むような無機質な味だった。ほんの数切れ口に入れたが、すぐに放り出した。今野は専らワインを楽しんだ。食事が一段落したところで、今野がおもむるにいった。

「これは余計なことかもしれないが、メキシコで商売をするのだったらここ当分は慎重に構えた方がいいんじゃないかね。ニューヨークでメキシコ債権国会議が開かれていることは知っているね、実をいうとメキシコはこの会議でデフォルト

を宣言するのではないかという噂が飛んでいるんだ。明日になればはっきりするが、これは確実のようだ」

「メキシコが債務不払宣言をするんだって、そりやあ本当の話か！」

「間違いない。嘘なんぞつくものか」

今野は多少とがめるようないい方をした。それはまさに今田にとっては衝撃のひとつことだった。今田の頭はカアツと無くなった。

世界の金融界を揺がすようなだいそれたことを、そう簡単には踏み切れまいと思っていた。もしデフォルトを実施するるのであれば、まず国際政治に与える影響も計算に入れなければならないはずだ。そんな乱暴なことをやれば、国際的孤立化は避けられまい。

それにしてもメキシコはなぜこの時期を選んで、あえてデフォルトを宣言しなければならぬのか。カルロス天然ガスをテコとして、これから経済再建にとりかかる、とっていた。自信に満ちたい方であった。カルロスということが事実だとしたら、無用な摩擦はできるだけ避け、アメリカとの関係を含めて、国際環境を改善することが、まず第一ではないか。それがもつとも妥当な道だろうと、今田は思った。

「どういうことなのか。デフォルトに踏み切る理由のことだ」

「明日の午前中の会議で、メキシコ蔵相が演説をすることになっているので、その内容をみないとなんともいえないが、想像するにどうも金融締めつけを強化しているアメリカに対する反発ではなからうかと思うんだが。いずれにしても明日はえらい騒ぎになることだけは確かだ」

デフォルトに踏み切るということであれば、いずれにしても国際金融界に大きな衝撃を与えることは間違いないであろう。場合によっては、メキシコに巨額な債権を抱えている銀行のひとつやふたつ、潰れる可能性すらある。与える打撃は想像以上に大きい。

「そうするとこれは、金融締めつけに対する報復ということか。それにしてもメキシコは成算があった上でデフォルトをやるのかね。正気の沙汰ではない。考えられないことだ」

今田は大きく首を振っていった。

「成算ね、はつきりいって、ないだろう。ただ、メキシコはぎりぎりのところま

で追い詰められていることは事実だ。だから破れかぶれの勝負に出たというところじゃないのか」

今野は冷静である。

「しかし、そんなことをやれば、国際経済社会から追放されることになる。貿易信用すらもストップしてしまう。デメリットの方がはるかに大きいと思う。いわば国家の倒産だ」

「ただ、こういう場合、いったん腹をくくれば、借りている方が断然強いというのが常識というものだ。実際、アメリカにしてもそんな過激な行動に出るとは考えていなかったじゃないか。その意味でこれは明らかに計算違いだった。メキシコはそこをいつているんだと思うんだ」

「つまりそれはこういうことだね。米国がメキシコに無条件降伏を追っているのに対して、メキシコは予想外の徹底抗戦にでた……それはそれとしてこれは、メキシコ一国にとどまるような問題ではない」

二人のやりとりは、なにやら激しいものになっていた。まわりの客たちもこれには、ちよつとびっくりしているようだった。不愉快な視線を彼らは二人のテーブルに投げかけていた。二人ともそのことには一向に気がついていない。今田は言葉を続けた。

「それに巨大な対外債務を抱える他の発展途上国は心情としていえば、メキシコの立場を支持するはずだ。その場合、債務国による逆カルテルなど、そうしたことがおこらないだろうか」

「まったく有り得ない話ではないと思う。しかし、債務国はそれぞれ国情が違うわけで、だから個別交渉で問題を解決した方が有利な条件を引き出すことが可能だということもある。とすれば債務国カルテルのような動きはとりにくいのではないが、僕にはそう思える」

「そうだとすれば、メキシコは孤立した闘いを国際金融界とやることになるわけだ。そうした強気な行動に走らせた根拠、それは先ほど君があげた理由の他に、なにかありそうな気がする。たとえば資源。やはり資源を持っている国家は強い。メキシコの石油の確認埋蔵量を現在価格に換算すると、対外債務の二十五倍にあたる。これはこの経済戦争を闘う上で、大きな支えになっている」

そこまで話したとき、今田にはカルロスとの会談のことを思い出した。彼は経

済再建に自信を持っているようだった。天然ガスの存在が判明したこと、そのことがアメリカを正面の敵に据えた、強硬な戦略を打ち出したことと無関係ではないように今田には思えた。

「メキシコの原油生産は、ピーク時で二百五十万バレルで、このうち輸出に廻していたのが百五十万バレルだったね。ところが八五年に入って生産が後退、現在の生産量は百六十万バレル程度だ。そうした現状から考えて、君がいうことには無理があると思う」

今野は否定的だった。

「しかし、国際エネルギー情勢が大きく変わる可能性もあるわけだ。情勢は決して固定的ではない。最近の中東情勢も周知のように、きわめて流動的になっているようだし、その場合、これはメキシコに有利に情勢は動くことになる」

確か、メキシコの対外債務は千二百億ドル程度のはずだ。仮にカール・ルビンズがいつていたようにエネルギー情勢が変わるとすれば、エネルギー価格は上昇を続けてこの程度の対外債務なんぞ、深刻な問題ではなくなる。今田はそういう意味のことを今野に聞いてみた。

「そう、対外債務は千二百億ドル前後。そのうち、公的債務が約六百億ドル。大半は七四年の債務支払い繰り延べ交渉で、八〇年代の前半に返済期限がきた債務を繰り延べられたものだが、困ったことに八七年以降、債務返済額が急増することになった」

「うん、それで……」

「このためメキシコは国際金融団に対して、再び債務繰り延べを要請していたのだが、アメリカが渋ったために、ご承知のような状態になっている。君がいうエネルギー事情が変わるという意味を原油価格が高値に修正されることだと理解すれば、それは中東で全面戦争が起こった場合など、非常事態が発生したとき以外には想定できない。そういう噂がでていることも確かだが、ちよつと疑問が残るね。どうも君の意見には同意しがたい」

「ただ、資源を担保にすれば、国際金融団も関心を示すのではないか」

「エネルギー事情がメキシコにとって好転するという前提に立てば、そういうえるかもしれない。しかし、今のメキシコに対しては誰だって動かないのではないか。しばらくは、静観するしかないと思う」

常識からいえば、今野のいう通りだ。それにメキシコの資源政策は外資にとって、いかにもハードである。それにしても、メキシコ政府が強気な政策を打ち出しているのは、この天然ガスの発見に関係があるはずだ。今田は次第に確信をもつて、そう思うようになっていた。ただ、これ以上、エネルギー問題に踏み込むと、どうしても天然ガスのことに触れざるを得ない。それではいかにもまずい。今田は話題を変えることにした。

「それはそれで、確証のない話だからひとまずおくことにしてだ、問題はアメリカの態度だね。あの時、つまり八四年の危機に際して、アメリカはメキシコを懸命になって救済した。ところがどうだ、今度の場合は、メキシコ潰しの急先鋒に廻っているではないか。そのアメリカの対応の変化というか、どうして対メキシコ政策を変えたのか。疑問として残るのが、デフォルトを選択せざるを得ないところまで、なぜ、メキシコを追い込んだかだ」

今野はちよつと考え込んでからいった。

「米墨間の懸案はいろいろあるが、アメリカの狙いは債務国に対して、選別救済の動きを強め、良い子に対してはきちんと助けるが、悪い子は駄目だぞ、という。つまりその意味でメキシコはかっこうのスケープゴートだったんじゃないかね」

今野がいうように、アメリカをはじめ債権国側は債務国の救済に対して、選別的な姿勢を強めていることは確かだった。最近、その傾向がとくに強くなってきている。簡単にいえば、米国の政策に協力的で、しかも戦略的に重要と判断される国の救済には力を入れるが、そうではない場合は、冷淡というか、救済には消極的だった。

「スケープゴートということか……」

「そう、メキシコはアンジェトロ政権になって以降、ことごとくアメリカに楯突いているからね。あの資源政策はいかにも刺激的だ。困ったことだが、それに民間の資金も途上国に流れる余地はほとんどなくなっている。実際、銀行屋としてもこれは困った事態なんだ」

「どうしてそういうことになっているんだろう」

新たにとつたワインを今野に薦めながら、今田がいった。

「簡単にいって、これは民間のネットの資金フローが急激に減少しているためなんだが、それにもうひとつ先進各国は、財政難で援助ペーアの資金提供にも限度

があるからね」

「なるほど……」

「加えて実質金利が高止まっていることも債務国の金利負担を過重なものになっていることは先ほど、君がいった通りだ。借り手である途上国の財政が苦しくなっているのは、予想以上に金利負担が重荷になっているからだ。実際のところその一方では、貸し手の方にもまったくといってよいほど、ゆとりがなくなっている。こうなると悪循環もいいところで、その深みにはまり込んで、抜け出せなくなっているというのが実情じゃないかね」

「確かに南北関係は悪循環に陥っている。だから一層貸し手の側からすれば、選別指向を強めざるを得ないというわけか。まして、あの強気なメキシコとあっては、全然可愛げがないからね……」

「可愛げがないといえば、最近、聞いた話だと、アメリカはアンジエト口政権にこれでもって打撃を与え、いつきに潰してしまい、親米的な政権を樹立することを考えているそうさ。つまり、アンジエト口政権は交渉の相手ではない、それがアメリカの態度だろうね」

「うん、その話はメキシコでも聞いた。それで、連邦情報局などの連中も盛んに、反政府運動を煽りたてているという噂だった。しかし、考えてみれば、露骨な内政干渉というものじゃないのか」

「ともかく、アメリカ人はパワーゲームが好きだからね。いずれにしてもアンジエト口政権は一年とあと少しの寿命だ。政局が安定するまでは、静観する以外にないのではないか。たいていの銀行屋はそう考えているようだ」

「なるほど。それも立派な選択のひとつに違いないが、デフォルトが宣言された場合、日本として当面、どのように対応することになるんだろう」

「それは難しい問題だ。まず、アメリカの対応を見極める必要がある。それに明日のメキシコ蔵相の演説の内容を詳細に検討しなければなんともいえないが、まあ大蔵省は対米協調ということで動くのではないか。それはまず間違いあるまい、そう思うね」

「政府ペーアの動きはそうだろうが、民間ペーアの話になれば、ちょっとスタンスが違ってくるんじゃないの。とくに大口の債権を抱えている銀行にとってはこれは死活問題だから、いくら対米協調が大切だといわれも、背に腹はかえられな

いからな」

今野は渋い表情をつくった。

「そこなんだ、問題は……。とくにうちみたいな場合は、大口の債権を抱え込んでいるだけに、立場は微妙だから目立った発言はできるだけ控えたいというのが、幹部の考え方のようだね」

「ところで、君自身はどうすべきだと、考える……」

「きつい質問だなあ、日本がその任にあるかどうか、関係国にとって日本が信頼に足りうる国家であるかどうかは別問題として、僕だったら日本は調停者としての地位で、事態打開のために動くことにするんだが……」

今野がそういって、弱よわしく笑った。しばらく、二人の間に沈黙が続いた。今野も相当の酒豪のはずだが、議論に熱中したためか、ワインの減り具合は思ったほどではない。今野の表情は、まるで素面だった。

「いつまで、ニューヨークにいる予定だ」

「実をいうと、まだ、はっきりとは決めていない。債権国会議がどのように決着するか、それを見極めてから帰りたいのだが……」

そうか、といって今野はワインを一気に飲み干した。だいぶ、夜も更けているようだ。それにしても、レストランの賑わいは相変わらずだった。時計を覗くと、すでに一時近くになっていた。

翌日の新聞は、メキシコがデフォルトを宣言したことを一面トップで大々的に報じていた。想像していた通りだと、今野は思った。いずれの新聞もセンサーショナルな見出しが掲げられていた。今野はルームサービスで取り寄せた朝食にも目もくれず、いくつかの新聞を読み比べてみたが、昨日、今野が話していたことと情報レベルでは大差がなかった。

念のために、テレビのスイッチをひねってみた。やはり朝のニュース番組では、メキシコがデフォルトを宣言したことをトップニュースとして取り上げていた。ちょうど、画面には腹をせり出すようにして、体を揺すりながら演説をするアルフォンマ・メキシコ蔵相の肥満した姿が映し出されているところだった。演説の内容は、現在の国際経済・金融秩序はいかに途上国にとって不合理なものであるかを、激しい調子で論難したうえで、メキシコが選択したデフォルトという行為

は防衛的な措置にすぎず、現在の危機回避の責任はあげて、アメリカを始め先進国側にあるといい切っていた。

それほど、内容のある演説だとは思えなかった。国際金融界を揺がす大仕掛けを演じた張本人にしては、えらく軽い調子である。その表情は得意げでさえあった。ただ、論理構成は単純であるだけに、迫力にとみ説得力があるようにも思えた。

もちろん、メキシコ向け信用状の発給はデフォルトが宣言されたその日のうちに停止された。さすがにその日、主要都市の金融市場は閉鎖されたが、ニューヨーク金融市場は翌日には再開された。不良債権がいつきに表面化、金融界は最悪の危機状態に突入するのではないかと、予想されていたのだが、金融市場は平静に機能を果たしていた。

これは不幸甲の幸いというべきであろう。いまのところ信用不安に陥った銀行は出ていない。ある程度今日のことを予想し対策を立てていたからかもしれない。それに懸念されていた、他の途上国の同調した動きもみられなかった。いずれも不気味な沈黙を守っていた。

事態が急変したことを知らせるため、東京に電話を入れてみたが、電話にでた大園はすでにデフォルト宣言のニュースは知っていた。今田が意外だと思ったのは、大園がかなり楽観的な見通しを持っていたことだ。

「なあにたいしたことはない。そのうち妥協点をみいだすはずだ」

今田は相変わらず強気な大園の発言を聞き、思わず苦笑いをした。そして大園は、しばらくニューヨークにとどまって、メキシコ関係の情報収集にあたってくれないかといった。今田は大園にいわれるまでもなく、情報収集に精力的に動いた。米国関西商事本社を訪ねてみたが、ここでもたいした情報は持っていなかった。メキシコに大口債権を持つ米銀も慌しい動きをみせていた。IMFの緊急理事会が開催されたのをはじめ、日米欧の主力銀行がメキシコ対策会議などに関いているようだった。

が、そのなかでいったいどうということが議論されているか、情報は断片的にか伝わってこなかった。ただ、主力銀行の対策会議は予想以上に難航していることは確かかなようだった。

今野も善後処理の対策で、忙殺はしつじされているようだった。千代田銀行は邦銀のな

かでもずば抜けた債権を抱えているだけに、今野は苦しい立場にあるに違いないと思った。何度か今野のオフィスに電話を入れてみたのだが、そのたびに会議中か、外出中ということで連絡はとれなかった。

あれやこれやしているうちにニューヨークに滞在して、ちょうど十日がすぎた。その間、ワシントンまで足を伸ばし、日本大使館やアメリカの政府機関とも接触を試みたが、確実な情報はなかった。多数の金融権威者は、事態が落ち着くまで、静観する以外にない、という無内容なことをコメントしていた。

ひとつ今田に不思議に思えることは、メキシコのデフォルト行為に対してアメリカ政府は財務長官の形式的な非難声明を発表しただけで、これといった対抗措置を採らなかったことだ。それはたぶん、舞台裏での秘密交渉と関係があるのだろうか、と思ったりもした。日本政府の金切り声に近い非難声明に比べればヨーロッパを始め、アメリカの対応は意外に思えるほど、落ち着いたものだった。

今田はその理由が知りたかった。それは、米墨間に裏取引が成立しているためではないか、といううがった見方も出ていた。それにしても危機回避のシナリオが動き出している気配はまるでなかった。関係者の口はあくまで堅かった。ただ、債権国会議の舞台裏では、虚々実々の激しいやりとりが交わされていることは、事実のようだった。

今田は次第に焦りに近いものを感じていた。せつかくのビジネスチャンスがこれでご破算になるのではないか。そう考えると、深い失望感を味わわざるを得なかった。ホテルの窓に覗くマンハッタンのけばけばしい賑わいが今田にはかえって恨めしくさえ映った。

(つづく)